

若年性認知症相談支援センター（コーディネーター）の支援事例 1

事例項目	①医療・福祉サービスの利用支援
内容	<p>〔相談を受けたきっかけ〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 夫 50 代後半（本人）の若年性認知症について、認知症の人と家族の会島根県支部の電話相談に妻がかけてこられた。 <p>〔相談者背景〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本人は職場に在籍していたが、1人で通勤はできず、妻が送迎していた。専門職だったので、配置換もできず休職になった。 ● 妻は専業主婦 ● 本人は高校生や中学生の子どもに、毎日大きな声で意味なく怒るので、父親の傍に寄りなくなった。コーディネーターが父親は認知症になって言葉や行動が思うように出来なくなることや、今後の対応の仕方も話した。 <p>〔支援内容〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 妻のストレスもかなりあり、妻にパートタイマーで働くことを提案。すぐに仕事が見つかり、ストレスはある程度自分で消費出来るようになったと話していた。 ● 本人に対しては、素直に通所は出来ないと思い、障がいサービスの日中一時サービスを行っている小規模多機能型居宅介護に頼んだ。本人へは「高齢者のお世話を手伝ってほしい」と頼み、高齢者をトイレに連れて行ってもらったり、食事の用意や片付けを手伝ってもらったりして過ごせるようになった。 ● 最初に障がいサービスの利用につなげたのは、本人が作業所に行けそうなら併用しようと考えたが、本人の認知レベルも下がり、気分が乗らなければ、通所すら出来にくい日もあり、1年後は介護保険に切り替えて小規模多機能居宅介護を継続した。 ● その後、本人は入院することになったが、引き続き、妻は何かと頼りにしてくれていて、成年後見などの手続きなどを聞いてきている。 <p>〔支援しての所見〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本人に対して他の職員や高齢の利用者も違和感なく付き合ってくれ、本人にとっても嫌な環境ではなかったと思われた。
ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人の状態を踏まえた障がいと介護保険サービスの利用支援を行った。 ● 本人が利用しやすい環境づくり（動機づけ）にも配慮した。 ● 本人だけでなく、家族への支援（心理的ケアなど）も行った。